校長室だより～燦燦～ №２６５

小学校の恩師

2021.1.6

私が小学校に入学してから中学校を卒業するまで実に多くの先生方に出会ってきた。お世話になった恩師の方々の中から５人の先生方を紹介し､昔の少年時代を懐かしく振り返ってみようと思う。

小学４年生の担任であったＡ先生である。

この先生は、学校の先生以外に、もう一つの顔をもっていた。お寺の住職さんだった。私が通った保育園があるお寺だった。とても字が上手な先生だった。書写の時間など、先生の書を見てほれぼれしたものである。

Ａ先生に感謝したいのは、漢字の筆順（書き順）指導に関してである。漢字の豆テストをやるだけの当たり前の指導であったが、書き順をきちんと教えてもらったという記憶がある。おかげで、今でも書き順にはまずまず自信がある。地味なことの繰り返しだが、続けることで大きな力になることを知った。

思うのだが、世の中に出ると、基礎学力がものを言う。それは、小学校と中学校で習得したものである。特に小学校の学習内容は、とりわけ重要である。そう考えると、小学１年生から４年生まで、じっとして椅子に座り、毎日学習できるかどうかがポイントのような気がする。落ち着きのない子は苦労する。漢字の豆テストなどにこつこつと取り組めるかが勝負である。マンネリは防げないが、それでもまじめに続けられるかである。こつこつが一番である。

それにしても、毎日ほれぼれするようなＡ先生の板書の字を見ていたにもかかわらず、全くその影響を受けなかったのはなぜなのだろうか。国語の先生だから字がうまいだろうと思われるのが辛い。

小学５・６年生の担任であったＫ先生である。

この先生には、２年間担任をしていただいた。休みの日にみんなで先生のお宅に遊びにいったこともあった。昔は、そんな時代だったのである。Ｋ先生に教えていただいたことで、今でも役に立っていることがある。それは、「何事も三つ」という教えである。「おならには、ビー、ブー、スーの三つがある。何事も三つ覚えるとよい」というものであった。

確かに、何でも一番目から三番目まで覚えておくと何とかなるような気がする。面積の大きい都道府県は、北海道、岩手県、福島県、日本で長さが長い川は、信濃川、利根川、石狩川といった具合である。一番目はわかるのだが、二番目、三番目になると、急に怪しくなる。エベレストや富士山はわかるが、その次はとなるとどうだろう。

Ｋ先生の教えを守り、私はよく何でも三つにすることがある。例えば、今年の目標などである。三つだと覚えられるし、意識もできる。人前で話す際にも、「今日は三つのことを話します」「大切なことは三つです」などと使っている。こうすると、話を聞いているほうも、今はいくつ目の話で、残りがどのくらいかの見当がつく。とりあえず、何でも三つで考えると、何とかなることを学習した。何事三つである。